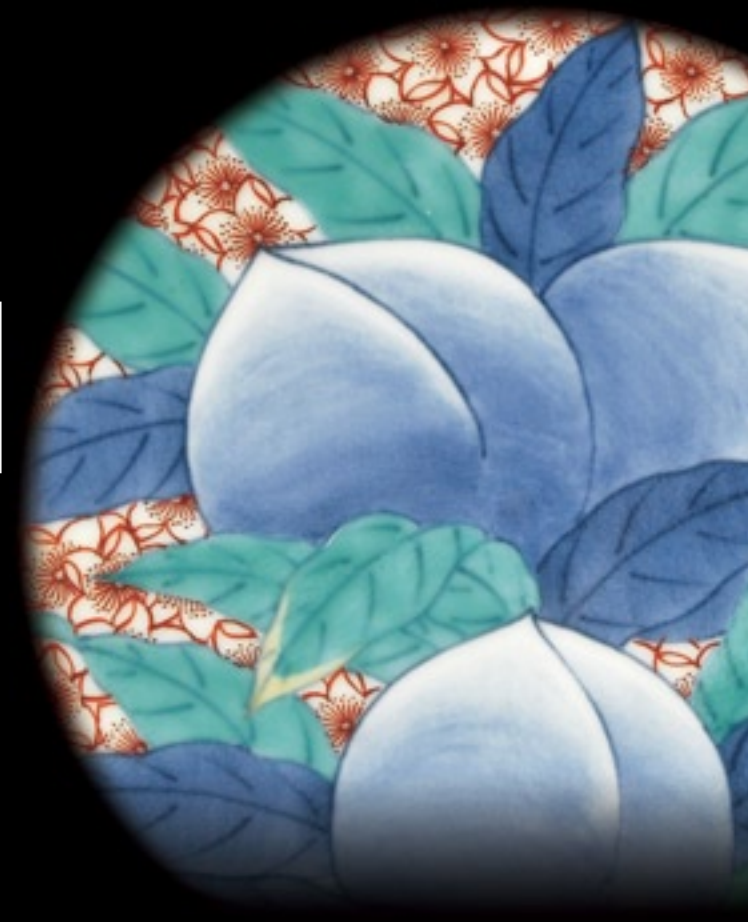


第十六回重要無形文化財保持団体秀作展



日本の伝統美と  
世界の



平成20年9月30日(火)~10月5日(日)

◆会場/佐賀玉屋(佐賀市・本館6階催事場) (入場無料)

◆開催時間/午前10:00 ~午後6:30 (最終日の10月5日は午後5時まで)

皿 季刊 山

No.79

有田町歴史民俗資料館・館報 秋 2008

開館30年企画展

# 「守り抜かれた伝統」 戦時中の有田焼

昭和53年10月に開館した有田町歴史民俗資料館は今年、開館30年を迎えます。この間、「正司考祺」展や「江越礼太」展、「千枚の写真が語る有田の近現代史」展などの企画展を始め、全十巻別編一冊の「有田町史」の発行や、有田町や有田焼の歴史をわかりやすく紹介した「皿山なぜなぜ」「おんなの 有田皿山さんぼ史」「有田皿山写真館」「有田皿山遠景」などを編集・発行し、町内外の皆様にご好評をいただきました。

また、この「季刊 皿山」も、資料館活動の中で得た情報を皆様と共有することを目的として発行してきました。有田皿山の歴史を顧みること、少しでも有田町・有田焼の未来の姿を見通すことができるのではないかとこの思いで活動しています。

今回の企画展では、名古屋市にある日本陶業連盟（以後日陶連と表記）の全面的な協力をいただき、長年所蔵されてきた未公開の「マルギ製品」とよばれている戦時中の有田焼——九点を紹介します。

## 歴史的な背景

昭和12年（一九三七）7月、中国・盧溝橋事件をきっかけに日中の全面戦争へと突入し、翌年4月1日には「国家総動員法」が施行されました。これにより国民は軍需産業に徴用され、衣料品、食料品、石油、電力、建設資材などが政府の統制下に置かれることになり、これらの影響で、昭和15年（一九四〇）11月、全国の陶磁器製品をすべて包含する改正公定価格が制定されました。価格は一級から十五級に区別され、流通上の

川浪喜作

段階を日陶連価格と卸売業者及び小売業者価格としました。その例を一つ上げると、三寸六分の蓋無し飯茶碗八級が日陶連価格一四銭三厘、卸売価格二二銭七厘、小売価格三〇銭という具合です。生産者価格は明示されていませんが、これは日陶連の共販ということになり、この場合の生産者の手取価格は、日陶連価格の五分引きということが附則で規定されていました。

## 企業合同

昭和16年、当時の商工省は陶磁器工業整備要綱を示達しました。その計画生産の実施に伴い、設備、燃料その他の資材及び労力の有効利用を図り、経営を合理化するために、製造業と錦付け業を対象とする企業合同の具体策を関係府県庁に於いて立て、昭和17年2月末までに企業の整理統合を実施するように命じました。

この結果、佐賀県内では四〇四あった工場が六六に激減したといわれます。有田でこの整備令の適用を受けなかったのは香蘭社、深川製磁、岩尾磁器、有田製陶所、青木碍子、工業社で、当時の人々はこれらを「有田の六大会社」と称したといっています。

## マルギ・マルゲイとは

前述のように政府は公定価格の制定に当たり、陶磁器の中でも芸術品には公定価格は適用しないで自由価格とし、「㊦」の表示をさせました。いわゆる「マルゲイ」と呼ばれるものです。また、芸術品と一般品の間には「技



香蘭社

# マルギに指定された 有田焼製作者

## 香蘭社

明治8年、翌年アメリカで開催されるフィラデルフィア万国博覧会に有田焼を出品するに際し、それまで独自に経営していた各窯元や商人が集まり合本組織香蘭社を始めた。その後、同12年には経営方針の違いなどから八代深川栄左衛門と深海墨之助・竹治兄弟、手塚亀之助、辻勝蔵らは袂を分かち、香蘭社は前者が独自の経営を行うようになった。現在の香蘭社はこの流れを汲む。

戦時中は否応なく、「呂」号兵器と呼ばれたロケット燃料製造装置や化学磁器など戦時体制下の製造を行った。しかし、多種類の碍子の成形などで優秀な成形工を必要とし、その結果、後に名人と呼ばれた初代奥川忠右衛門等の優秀な職人によって同時に美術品も生産された。その後、昭和45年株式会社香蘭社に組織変更し、碍子・美術陶磁器など国内市場の開拓はもとより輸出の振興を図り、有田焼メーカーの代表として大きな役割も果たしている。

## 柿右衛門窯

17世紀中期ごろ、初代酒井田柿右衛門によって赤絵付け（上絵付け）の技法を確立し、日本で初めて色絵磁器を完成した。その後長崎・出島を経由して広く海外へ輸出され、六代柿右衛門のころから日本画的な文様が定着し、いわゆる「濁手」とよばれる乳白色の素地に余白を残した文様構成は「柿右衛門様式」としてヨーロッパの王侯貴族に愛でられた。それらは各地の窯場にも影響を与え、「柿右衛門写し」としても盛んに製造された。

昭和28年ごろの十二代、十三代柿右衛門によって、長い間途絶えていた濁手素地が復元された。工房は昭和46年4月、国の重要無形文化財保持団体（柿右衛門製陶技術保存会）に指定され、現当主十四代柿右衛門氏は重要無形文化財（いわゆる人間国宝）に指定されている。

## 今右衛門窯

一六一〇年代に始まった有田焼の流れの中で、17世紀中ごろに赤絵付けの技法が確立され、その後、佐賀藩によって赤絵付け業者の数や住居も限定された。赤絵付け業者の中でも、今泉今右衛門家は鍋島藩

術保存を必要とするもの」の分野を設けて、価格の統制からはずすとともに、その維持育成のために資材供与の便宜その他の保護策を講じることにしました。これが「磁」、マルギ製品です。

まず昭和17年に日陶連は「技術保存認定審査会」を設置し、全国陶磁器業者に作品の提示と指定申請を呼びかけ、審査を行いました。その結果、五九の業者、個人が技術保存資格者として文部省より認定され、日陶連より交付される「磁」証紙を作品に貼り付け、自由価格で製品販売ができるようになりました。同時に制作に必要な統制物資についても、それぞれの機関により特別に配給を受けられるようになりました。

有田焼で「マルゲイ」に指定されたのは陶芸家として活躍していた初代松本佩山であり、「マルギ」は



柿右衛門窯



今右衛門窯

香蘭社、深川製磁、柿右衛門窯、今右衛門窯、川浪喜作、満松惣市と、佐賀県内ではほかに伊万里・大川内の小笠原春一と市川光春、唐津の中里太郎右衛門が選ばれました。

### 最後に

平成28年には有田焼創業四〇〇年を迎えようとしている有田焼の歴史の中で、昭和10年代というのは否応なく戦時体制に組み込まれていき、物資も生産に携わる人も激減した時代でした。半面、その非常時にあつて国を挙げて伝統のわざを絶やさないようにと努力をした人々もまた存在しました。今回紹介した



深川製磁

一一九点の作品は、物的、人的不足の時代に懸命に生きた人々がいた事実を静かに語り伝えていきます。平和な現在にあつて、有田焼に関わる多くの人々の努力の甲斐なく、さまざまな社会環境によつて有田焼の伝統が危うくなつてきていることもまた事実です。しかし、先人のわざを、伝統を次の世代に伝えていくことは現在に生きる我々の世代の使命でもあると思います。そのことをこれらの作品から汲み取っていただければ幸いです。

(文中敬称略)

期日 平成20年10月17日(金) ~ 11月26日(水)  
場所 有田町歴史民俗資料館(泉山) 入館無料

開館時間 9時 ~ 16時30分  
※開催中11月22日(土)・23日(日)は夜間開館(紅葉ライトアップ)

窯の御用赤絵屋として上絵付けの部門を担当した。明治以降は藩の保護を離れ全工程を独自で行い、工房としては昭和51年4月、柿右衛門窯に引き続き国の重要無形文化財保持団体(色鍋島今右衛門技術保存会)に指定された。先代は有田焼では初めての重要無形文化財(人間国宝)に選ばれた。現在は十四代今右衛門氏を中心に、色鍋島と呼ばれる柞灰釉による青みのある釉薬、染付けの青、赤絵付けの赤・黄・緑、洗練された草花文様等で構成された作品を生み出している。

### 深川製磁

明治27年、八代深川栄左衛門の次男・深川忠次によつて有田焼を世界に広める目的で、富士山をトレードマークにして陶磁器の製造、販売を行う個人会社が設立された。明治44年株式会社組織を改め、二代目の深川進は佐賀県陶磁器工業組合の理事長として、戦時中の有田焼業界のリーダー的な役割を担った。

現在も有田焼業界をリードする会社として、伝統的な有田焼に新しいデザインを加えた作品を作り出している。

### 川浪喜作

慶応元年泉山に生まれ、幼少より南画の大家であった高柳快堂の塾で学び、明治14年に開設された勉修学舎(陶磁器工芸学校)の第一回入学生となった。その後、絵付け職人として岩谷川内の大窯焼き藤崎太平窯を経て、香蘭社で腕を振った。藤崎太平窯ではロクロ細工の名人といわれた井手金作とのコンビで数々の作品を生み出し、現在陶山神社境内にある手水鉢はその代表的な作品のひとつである。

「マルギ」の指定を受けたのは78歳のとき。卓越した技術を保持する職人として指定されている。

### 満松惣市

佐賀市出身で、明治41年第5回有田工業学校図案科の卒業生である。当初深川製磁に勤務し、大正5年9月から6年8月にかけて、大日本窯業協会雑誌に深川製磁株式会社図案部主任として意匠標本を発表している。その後独立し白川で満松製磁を始めているがその年代はよくわからない。主として昭和初期に大流行した帯止めを制作しているが、戦時中の「マルギ」製品として納めたと思われる作品は日陶連には現存しない。昭和23年当時の有田焼輸出状況調査では、GHQ大阪購買部からミクロス製品五〇〇個の受注を受けている。

## 片岡源次郎の挿絵本



このほど、神崎市在住の末岡朱美さんを通じて、アメリカ・ロスアンゼルス在住の近藤裕美さんがアメリカで入手された本で片岡源次郎が挿絵を描いた『LITTLE SISTER SNOW』を寄贈していただきました。

アメリカ滞在中の片岡源次郎は有田町白川の出身で、明治24年ごろ渡米し、ニューヨーク・ブロードウェイで活躍した画家です。しかし、長い間その活躍を知る人は有田は勿論、日本国内でもあまりいませんでした。

しかし、平成12年3月、あるきっかけでサガテレビによるドキュメンタリー番組が制作され、孫の有田町白川在住の田中祐喜子さん姉妹が渡米し、源次郎の足跡を訪ね、アメリカでの活躍や作品などが紹介されました。(館報 No. 45参照)

これまで、詩人の野口米次郎(彫刻家イサム・ノグチの父)との交流や各種出版物の挿絵を書いたことはわかっていましたが、実際にその挿絵を目にしたことはありませんでした。

今回の本や、ほかにもラフカディオ・ハーン of 著作などに挿絵を描いているということですが、この本を見る限り、日本風の絵の中に、随所に火鉢や茶道具などが描かれていて、故郷・有田を遠く離れた源次郎の日々がうかがえる貴重な資料です。



『LITTLE SISTER SNOW』



挿絵(一部抜粋)

## 有田中学校生徒の 職場体験

毎年、夏休みになると有田中学校からの職場体験依頼が来ます。例年は2、3人の希望者でしたが、「今年は7人の生徒が希望していますが、大丈夫でしょうか?」という先生の心配をよそに、子供たちは暑い日差しの中を元気に来館。

8月26日から28日の3日間、古窯跡出土の発掘



作業中の中学生

陶片の整理作業を体験してもらいました。初めて経験する作業だったようですが、発掘後の陶片の水洗いや出土地点を割れ口に記録していく注記という細かな作業などを真剣に取り組んでいました。子供たちの将来の選択肢に、資料館や博物館の学芸員という職種が組み込まれたら、当館としても嬉しく思います。2学期も勉強や部活に頑張って、青春を謳歌してください。

### 体験者

辻 大樹 君	佐藤 美香子 さん
米田 実 君	本島 沙希 さん
田中 龍帆 君	吉田 成穂 さん
横田 尚丸 君	

### 季刊『皿山』

通巻79号(平成20年9月1日)  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185